

## 日本の統一的土地分類体系（第二次案）

（中間報告（５））

日本ペドロロジー学会第四次土地分類・命名委員会

Committee for Soil Classification and Nomenclature: Unified Soil Classification

System of Japan (2<sup>nd</sup> Approximation) (An Interim Report (5))

### １．はじめに

第５回の第４次土地分類・命名委員会は４月１日に KKR ニュー目黒にて開催された。出席した委員は、菊地委員長，平井委員，小崎委員，中井委員，伊藤委員，橋本委員，田中委員，森貞委員，金子（真）委員，神山委員，三土委員，高橋委員，山本委員，加藤委員，永塚委員の１５名であった。４月１日より，引き続いて統一的土地分類・命名案（二次案）の作成を行うこととなったが，グループ責任者の交代および委員の増員が議論された。その後，３月１８日の会議において議論された内容が確認され，前回議論が不十分だった項目について議論がなされた。また，前回までの議論により，整理された土壌大群とその定義について事務局より二つの案（[資料 1](#)）が提示された。この案にもとづいて議論が行われた。主に議論された内容を以下に紹介する。

### ２．石灰質土壌グループに関する議論の概要

石灰質土壌グループの土壌大群暗赤色土について：暗赤色土大群を定義するための特徴土層に関する質問がなされ，石灰質土壌グループでは，WRB の基準を用いることになるとの意見が提出された。具体的には，「Mollic 表層」，「Argic 層」および「Cambic 層」についてであった。これらを用いて，暗赤色土をキーアウトするためのキーづくりが金子委員に依頼された。

### ３．台地土壌グループおよび低地土壌グループに関する議論の概要

グライ土（湿性台地土の別称であるが，仮称）大群について：地表下 75 cm 以内にグライ層の上端が現れるという表現の 75 cm は WRB (FAO 1998) の場合は 50 cm となっているが，この WRB の基準と整合性のあるように，50 cm にする必要はないのかどうかについて議論された。また，灰色化層をもつものもグライ土大群に入れるのは，WRB との整合性がないのではないかと意見が提出された。この点に関しては，もし，国際土地分類の基準そのものを日本の土壌に適用するような分類・命名案を作成するのであれば，この委員会は必要ないことになるとの意見から，日本の土壌特性に基づきかつ，国際的な分類・命名案とも整合性のある分類案を提案することが確認された。このグライ土大群の定義については，台地土壌グループで再検討することになった。また，土壌の属性に基づいて土壌を分類・命名する場合，その深さについて議論された。前回の委員会で，低地土壌グループからの提案で，Soil Taxonomy (1998) では，125 cm までの層位で炭素含量の分布がイレギュラーであることが「Fluvis properties」の一つの定義であるが，これを

100cmとしたのは、日本の土壌調査の実態に合わせたためだった。このため、本委員会では、深さ100cm間での土壌の特性によって、土壌を分類・命名することが確認された。また、未熟土と沖積土の相違に関して、明確な説明ができるように次回の委員会までに準備するように、低地土壌グループに依頼された。

灰色台地土と灰色低地土とはその断面形態は類似しているが、その特性は異なっているので、区別すべきとの意見が提出された。

#### 4．造成土壌グループに関する議論の概要

前回の議論で、造成土は下位でキーアウトするとの提案がありましたが、この点について、第一番目が最後にキーアウトするかに関することと、造成土の定義について次回の委員会までにグループ内で議論して欲しい旨の提案がなされたが、その際に、造成土も100cmまでの土層を対象として、その基準を作成することが承認され、その方向で整理することとなった。なお、今回の委員会において事務局より提案された、キーアウト順は最後尾で、特徴表層、特徴次表層の何れももたない土壌であるとの考え方が提示された。まだ、この造成土のキーアウト順に関しては、合意が得られませんでした。

#### 5．林野土壌グループに関する議論の概要

褐色森林土大群と黄褐色森林土大群について：一次案の土壌群を土壌大群へのとりまとめの際に、黒ぼく土グループは黒ぼく土、準黒ぼく土、未熟黒ぼく土を取りまとめて、黒ぼく土大群としているのに対して、林野土壌グループでは、一次案の土壌群がそのまま、大群に移行しているのは、趣旨に添わないのではないかとの意見や、アンケート結果にも示されているように、褐色森林土と黄褐色森林土については国際的な土壌分類・命名では、Cambisols(WRB)や Inceptisols(Soil Taxonomy)に分類されるため、土壌大群としてまとめるべきではないかとの意見が提出された。黄褐色森林土については、松井氏、遠藤氏が提案されてきたように、中国、韓国や日本の照葉樹林帯に特有な土壌で、ヨーロッパやアメリカには存在しないことを世界に発信する意味でも大群を設けるべきであるとの意見が提出された。また、土壌生成作用には差が認められるか否かやキーアウト方式によれば、一次案の褐色森林土の分布面積が限られてしまう可能性が高いことも紹介された。このようにまだ合意にいたらないため、結論は次回に持ち越された。

#### 6．その他

土壌大群の名称に関しては、定義を作成することを最優先にするために、委員全員の合意が得られていないが、分類・命名案が成案に近づいてきた段階で再考することになった。

以上、第5回分類・命名委員会の概要を紹介した。日本の土壌を低地から山地まで概観できるような分類・命名案作成を目指している。会員の皆様からのご意見をお待ちしている。

連絡先：〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学農学部 平井英明

E-mail: [hirai@cc.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:hirai@cc.utsunomiya-u.ac.jp), FAX: 028-649-5401

## 資料 1

### 土壌大群のキーアウト順と定義

#### (案 1)

1. 泥炭土：「泥炭層」をもつ土壌。
2. ポドゾル性土：その他の土壌で、「ポドゾル性土層」をもつ土壌。
3. 黒ぼく土：その他の土壌で、「黒ぼく土壌物質」を表層 50 cm のうち、積算で 30 cm 以上存在する土壌。
4. 暗赤色土：その他の土壌で、「風化変質層」をもちかつ、塩基飽和度が 60 % 以上の土壌。または「Mollic 層（黒土層）」をもつ土壌。
5. 沖積土：その他の土壌で、「沖積物質」をもつ土壌。
6. グライ土：その他の土壌で、地表下 75 cm 以内に「グライ層」の上端をもつ。または地表下 50 cm 以内に「灰色化層」の上端をもつ土壌。
7. 赤黄色土：その他の土壌で、かつ「赤黄色土層」をもつ土壌。
8. 褐色森林土：その他の土壌で、「風化変質層」をもつ土壌。
9. 未熟土：その他の土壌で、「特徴表層」をもつ土壌。（注：人工的営力により土層分化の認定が困難な土壌を除くための定義）
10. 造成土：その他の土壌。

#### (案 2)

1. 泥炭土：「泥炭層」をもつ土壌。
2. ポドゾル性土：その他の土壌で、「ポドゾル性土層」をもつ土壌。
3. 黒ぼく土：その他の土壌で、「黒ぼく土壌物質」を表層 50 cm のうち、積算で 30 cm 以上存在する土壌。
4. 暗赤色土：その他の土壌で、「褐色森林土層」もしくは「黄褐色森林土層」をもちかつ、塩基飽和度が 60 % 以上の土壌。または「Mollic 層（黒土層）」をもつ土壌。
5. 沖積土：その他の土壌で、「沖積物質」をもつ土壌。
6. グライ土：その他の土壌で、地表下 75 cm 以内に「グライ層」の上端をもつ。または地表下 50 cm 以内に「灰色化層」の上端をもつ土壌。
7. 赤黄色土：その他の土壌で、「赤黄色土層」をもつ土壌。
8. 褐色森林土：その他の土壌で、「褐色森林土層」をもつ土壌。
9. 黄褐色森林土：その他の土壌で、「黄褐色森林土層」をもつ土壌。
10. 未熟土：その他の土壌で、「特徴表層」をもつ土壌。（注：人工的営力により表層土壌発達の認定が困難な土壌を除くための定義。）
11. 造成土：その他の土壌。